心に残るとっておきの話

普及版第七集

潮文社編集部編

心に残るとっておきの話

普及版第七集

潮文社編集部編

心に残るとっておきの話　第七集　〈普及版〉

平成15年 2月25日発行

編　者　潮文社編集部
発行者　小　島　米　雄
発行所　株式会社 潮 文 社
〒162-0843 東京都新宿区市谷田町 2 —31
電話 03—3267—7181(代)
振替・00140-7-69107
組　版　株式会社 三光デジプロ
印　刷　有限会社 埼京印刷
製　本　株式会社 越後堂製本

© CHOBUNSHA 2003 Printed in Japan
落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。
ISBN4-8063-1361-0

人間の再発見

新装普及版の発行にあたって

人生はドラマだといわれる。

しかし私達は、日々、その機微に触れながら芳潤な高級ワインの味と香りを、安価な合成酒なみに飲みくだしてしまってはいないだろうか。

『心に残るとっておきの話』が、多くの読者の感動を呼んできたのは、市井の実人生の中に、世の名作を凌ぐ真実がちりばめられているからに違いない。

「人間万歳と叫びたくなるような一冊です」「何気ない巡り合わせを、流砂のように流してしまうか、玉として残すかは、その人の感性を表わすものでしょうか」

「絶句――目のウロコが数十枚落ちる音がしました」「心底をゆさぶる強い衝撃、かつて味わったことのない感動は、魂の根源を問うに充分であり、感謝せずにはいられない」「真実の言葉がこんなに胸を打つものかと、思わず本に有難うと言ってしまいました」「どの編も人の真実の心を観ずることができる。正に現代の経典というべ

きものかと思います」「65年生きて、これ程ぎりぎりの線で感動、感銘を受けた事があるだろうか。何かこれからでも出来る様な気がします」「この本は本当に素晴らしい。山にたとえれば、本の富士山です」「この本を読んでいると優しくなれる。失いかけていた自分の原点に戻れる。そんな本です」「ひたひたと押し寄せる感激に胸が一杯です。仰ぎ見る人生讃歌の金字塔です」等々々——

全国から寄せられた、こうした読者の声にも心打たれるものが多かった。

もっと読みやすく、もっと安く——という読者の方々の要望にお応えし、文字も大きく、ふりがなも多くして、ここに新装普及版を出すことにしました。一冊あたりの収録篇数は減りましたが、順次発行の予定です。少しでも多くの方々に読んでいただけると幸いです。

潮文社編集部

（なお、筆者の職業等は旧版当時の記載のままになっています）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

一話千金

一片の言葉、一つの話に、その人の人生への思いが込められていることがある。
「春宵一刻、値千金」という言葉もあるが、ここに選ばれた話には、まさに一話千鈞の重みと味わいがある。
『心に残るとっておきの話』も、今回で第七集になった。
山海の珍味を前にしたパーティーでのスピーチは短いほどいいと言われるが、ここでは色とりどりに咲き匂う花園を前に、野暮なコメントは差し控え、花の美しさは花自身に語ってもらうことにしたい。
貴重な話を寄せて下さった皆さんに心から厚く御礼を申し上げたいと思う。

平成十二年六月

潮文社編集部

（この普及版第七集には四六篇を収録、残り二篇はいずれ後篇に入れる予定です）

（平成十五年二月）

心に残るとっておきの話　普及版第七集／目次

人間の再発見　潮文社編集部

一話千金

二つの笑顔　池田　伸一　元印刷所経営　九

山姥（やまんば）のイチゴ　在原　哲子　喫茶店経営　一六

言うまいと思いつつも　加美山あい子　主婦　二〇

あたたかい手　星川　千里　主婦　二四

七つの朝顔　滝口　直美　主婦　二九

日本人の忘れ物　田中　三郎　元小学校教師　三四

いい香り　藤本　文明　元会社員　三七

吉田先生のこと　成松美代子　呉服商　四二

母の頬（ほお）ずり　坂本ユミ子　事務パート　四六

パリにて　山田　瑛子　家裁家事調停委員　五〇
同行二人（どうぎょうふたり）　土窪　盛雄　農業　五四
鉛筆とチューインガム　佐藤　鶴　歌謡教室講師　五九
耳順（じじゅん）　千原　享　会社役員　六五
ふるさと　川野　淳子　看護婦　七二
一期一会（いちごいちえ）　國府　哲理　元小・中学校校長　八一
鵯（ひよどり）の親子　安沢　阿弥　日本画家　八七
心の校歌　横林　哲也　元高校教頭　九四
卒業旅行　柴田　隆司　会社員　九九
シャクナゲ行脚（あんぎや）　橋本　ヤス　元中学校教諭　一〇三
海の中の火柱　末国　正志　会社員　一一一
エイ・ヤー先生　伊藤　忠男　マンション管理員　一一四

生命（いのち）の香り　北川　晋三　元建設会社勤務　一一九
お釣りと五円札　萩原　近造　行政書士　一二四
面会人　田野　明　貿易会社役員　一三二
半本の松茸　宮里紀恵子　無職　一三六
エーゲ海の嵐　中谷　健三　元高校教師・洋画家　一四一
夫のサラ金　押川　澄枝　給食事業所所長　一四五
トルコの旅で　梶谷　征子　元小・中学校教員　一五〇
舞い下りてきた一万円札　郷田　知美　博物館勤務　一五四
とっておきの薬　木村登見代　看護婦　一五八
遥かなる友へ　小杉　虹児　小学校勤務　一六二
あの日の説教　大橋　勇　大学名誉教授　一七一
奇跡の声・還・　若松由美子　主婦　一七五

窯変（ようへん）　満松美代子　元高校教師　一八四
アメ玉　川合　照　元小学校助教諭　一八六
忘れ得ぬことば　小野泰三郎　医師・医大講師　一九三
あの時はアリガトウ　島田　昭治　元新聞記者　二〇二
私の宝物　脇谷　マス　元小学校代用教員　二〇八
たんぽぽの花　関村　亮一　元小・中学校校長　二一八
私の第一の命日　山下　勉　元高校教頭　二二二
命の灯（ひ）　兼光恵二郎　会社相談役　二二八
回生（かいせい）の虹　木村　史朗　元警察官　二三三
祖父からの心の遺産　坂本　玲子　書道塾経営　二四二
チッタゴンの墓標　栗田　毅良　業界新聞支局長　二五一
戦場の山桜　田尻　恒　薬局経営　二五九

梵鐘（ぼんしょう）

今西　治
元警察官

二六四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

二つの笑顔

池田　伸一
昭和十年生（広島県）
元印刷所経営

教育改革が叫ばれているが、新聞などで「いじめ」による自殺というような記事を目にすると、私は遠い過去が想い出されて、胸が痛む。

実は、私は「いじめる」方ではなく「いじめられる」方であった。私が国民学校（現在の小学校）に入学したのは、一九四二年（昭和十七年）であった。私は幼時に罹（かか）った小児マヒの後遺症で左手が使えなかった。

そのため、私はランドセルを持たせてもらうことができず、布製の肩から掛けるカバンを持たされた。クラスに一人だけ違った格好をしているものがいれば、皆が面白がるのが

当たり前かも知れない。左手は小児マヒのため細く、指は変形して曲がっている。運動も遊びも皆と同じようにはできない。右手だけしか使えないのだ。そんな私が、格好の「いじめ」の対象にされ、からかわれるのも当たり前であったかも知れない。

そのことに担任のK先生はすぐに気づかれた。K先生は女の先生であった。私には先生の年齢はよく分からなかったが、若くはなかった。

「伸一君はどうして、この『カバン』を持って来ているか分かりますか」と、K先生は私を教壇に先生と並ぶように立たせて、私の『カバン』を皆の前に差し出すようにして見せ、「伸一君の左手が使えないのがどうしてだか、分かりますか」と皆に問いかけられた。

「みんなも分かっていますね？　伸一君は、小さい時の病気で左手が使えなくなりました。君たちも、いつ病気や怪我をするか分からないでしょう……。どんな事で手や足が動かなくなったり、目が見えなくなったり、耳が聞こえなくなったりするか分からないんです。そんな時、君たちも、友だちからその真似をされたら、悲しいはずです。だから、伸一君の左手の真似をしたりしないようにしましょう」

そして先生は、

「分かりましたね」と言われ、自ら「ハイッ」と大きな声で手を上げられた。それにつられるように皆も先生に合わせて「ハイッ」と手を上げたのであった。

その日から、私は休憩時間も皆と一緒に遊び、体操も皆と同じように右手だけでするようになった。それでも初めのうちは、やはり級友の目を気にして恥ずかしかった。体操の時間がくると、逃げ出したいと何度も思ったが、先生の目から逃れる勇気はなかった。そんな私に、先生は、

「みんなと少しも変わらないよ。何も恥ずかしがることはないよ」

と必ず、体操が終わると声をかけて、ぽんと肩をたたかれた。

こうして私は一人だけ違う『カバン』を、平気で肩に掛けるようになっていった。

しかし、父母参観の体操の時間だけは、休んで見学したかった。

「休ませて下さい」と言う私に、先生は、

「お父さんも、お母さんも、君だけを見に来られた訳ではないのよ。大丈夫、勇気を出してみんなと一緒にやろう――」と、尻込みする私を励ますように言われた。

それでも私は、子供心に、大人のみんなはどう思って見ているだろうと、視線をそらす

こともできなかった。

しかし、この参観日の体操は、私に何か自信のようなものを植えつけてくれた。

このことはずっと後になって気づいた事だが、恐らく先生は、これからの長い人生を、他人の思惑に気をとられず自分なりにのびのびと生きることの大切さを教えようとされたのではないか。

その日、参観に来ていた母も、家に帰ってから、「よくやったね」と言い、私の一番気になっていた、片手だけの体操も、少しもおかしくはなかったと言って、不自由なその私の左手を握り締めた。

私はこの時、K先生がいればもう大丈夫だ、と思った。それ以来、私はみんなと同じように遊ぶこともできるようになった。

私の学校生活はこうして始まり、やがて夏休みを迎えた。私には、この初めての夏休みには特別の思いがある。

今でも、私は梅雨が明け、夏の太陽が照りはじめると、身体の中から泉のように湧き出してくるものがある。

それは夏休みの宿題に、私が『向日葵(ひまわり)』の絵を画いたことからはじまった。
K先生から「お家の庭に咲いていた、ひまわりを画いたの？」と聞かれた時、私は家の庭にも『ひまわり』は咲いていたが、私が画いたこの『ひまわり』は、三歳過ぎに罹った小児マヒのため、最初に連れて行かれた医院の庭に咲いていたものだと答えると、先生は不思議そうに、
「伸一君は四年も前のことを覚えていたの？」と言われた。
私はその時、その医院の診察室の窓から見た、向日葵の黄色い大きな花を忘れることができずにいた。
「家の庭に咲くひまわりを見て画いたら、あの時の医院のひまわりになったんです」
と私が言うと、
「どうして、その時のひまわりと分かるの？」と聞かれた。
「あの時のひまわりは、ぼくに笑ってくれたから、それで覚えているんです」
私はその時の向日葵の黄色い笑顔を、はっきりと覚えていた。
じっと絵を両手でかざすように見ておられた先生は、

「ほんとうだ、こうして眺めていると笑ってくれている」
と、にっこり笑われると、
「伸一君は、こんな明るい仲間といつも一緒でよかったね。これからも決して離れないで、悲しいことがあったり、何か困ったことがあったら、このひまわりとお話をするんですね。きっと勇気をくれるから……」
と言われて、私の右手に、その向日葵の絵を持たせるようにして、返して下さった。
それからは、私はこの向日葵の絵を見ると、にっこり笑う向日葵の顔が、いつの間にか、K先生の笑顔に変わるのだ。
私は中学校、高等学校とも健常者と同じ学校で学んだ。障害者であるが故の苦悩に直面することが何度かあったが、この向日葵が「負けてはいけない」と、いつも笑顔で励ましてくれた。その笑顔の向こうにはいつもK先生の笑顔があった。
私が成人し、社会に出て、障害を人に隠すことをしなかったのは、一年生の時、K先生から障害がある私に、健常児と同じように接してもらい、運動や遊びを皆と一緒にさせてもらったお蔭だと思っている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c